

雁かりの行衛ゆくゑに打見うちみても

故郷こきやう

旅路たびぢならねど旅衣たびころも

うら珍うらめらしき夜のよ様さまを

都みやこ

見みせんよすがのなきなき

懐なつかしき文ふみの御返みかへしに

故郷こきやう

君きみが手馴てなれの文机ふつくに

一夜ひとよを千代ちよと語かたりあかさん

都みやこ

一夜ひとよを千代ちよと語かたりあかさん

御返みかへしの文ふみかさはて、

吾古里わがふるさとのなれ衣ころも

結むすぶは今宵こよひ初草はつぐさの

見みせんよすがのなきなき

同おなじ衾ふすまに二人ふたりして

筆ふでとりかはすはらから

ありし面影おもかげ恐おそひつゝ

一夜ひとよを千代ちよと語かたりあかさん

一夜ひとよを千代ちよと語かたりあかさん

恐おそぶにあまる母ははの身みを

新年しんねん梅うめ

不盡ふじん廻まわり舎しや

霞かすみがへる

御空みそらも匂におふ

霜しもをあざむく

それよ『この花』

お正月しょうがつ

事ことの始はじめの

いざ羽子はなつかん

いざたこあげん

軒端のきばの梅うめは

霜しもに堪たへたる

清きよくをしく

心こころにかざし

天あまつさざりの

初日はつひのかけに

たい一輪いちりんの

春はるべし知らぬ』

お正月しょうがつ

いもとよ友ともよ

おとよ友ともよ

ささがけぬ』

その花はなの

け高たかき装よそはひ

身みにつちまとい